

第3章 遺構と遺物

第1節 支群A

(1) 支群Aの概要 (第16・17図、図版2・3)

支群Aは古墳群の北東に位置する。南から北に向かって伸びる丘陵の突端に近い場所にある。35号墳と39号墳の2基で構成される。支群Aは他の支群とはやや隔絶的な位置にあり、加えて35号墳が古墳時代前期の前方後方墳と評価されていることから、正直古墳群の築造契機となった支群と言える。

35号墳は古墳群で唯一の前方後方墳である。後方は、1968(昭和43)年に正直の集落内へ移されるまで「菅布瀬神社」として使われていたため、墳頂や斜面には現在でもその痕跡を見ることができる。墳頂の中央北寄りには、方形に廻る社殿の基礎石列が現表土面に食い込むように残され、東側くびれ部からわずかに東に寄った斜面には、基礎石列に正対するように取り付けられた石敷きの参道階段が確認できる。また、基礎石列の周囲を含めて南側と東側は、神社の敷地として整地されたと思われる平坦面が広がり、北側から西側にかけては、基底部幅 3.3~5.5m、平坦面との比高 0.3~0.9mの土塁のような高まりが、鉤の手状に屈曲しながら伸びている。

35号墳では、墳端の確定と周溝の確認、併せてそれぞれの斜面における盛土の状態を把握するため、合計9本のトレンチを設定した。第1トレンチは、想定主軸線上の墳頂北端付近から北斜面を経て、その北側に広がる平坦面にかけて設定した。また、第2・3トレンチは、想定主軸線に直交する後方部想定中心線上の東西両側にかけて設定した。第4・5トレンチは、想定主軸線に直交する前方部の東西両側に設定した。第6トレンチは、前方部南東コーナーに、第7トレンチは西側くびれ部に設定した。第8トレンチは、墳頂部の埋葬施設を確認するために設けたトレンチで、第9トレンチは後方部北東コーナーを検出するために設定したトレンチである。

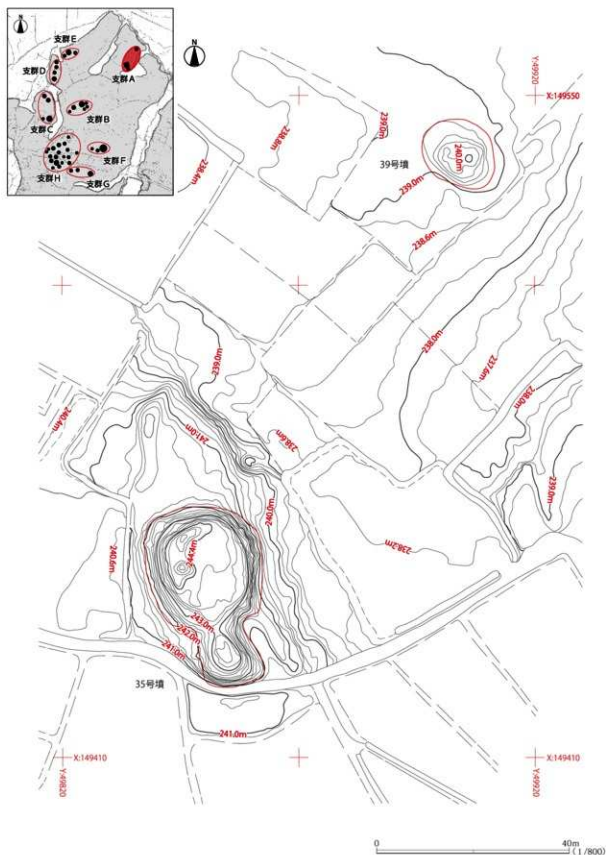
39号墳では、トレンチ調査は行わず測量調査のみを実施した。

(2) 正直35号墳

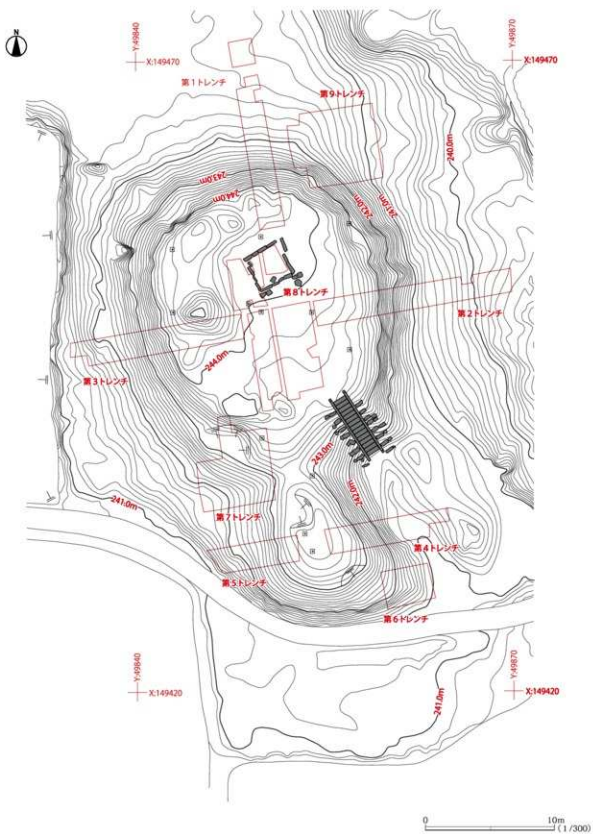
1. 後方部北側・第1トレンチ (第18図、図版4・7)

第1トレンチは、想定主軸線上の墳頂北端付近から北斜面を経て、その北側に広がる平坦面にかけて設定したトレンチである。墳頂北端付近が神社基礎石列の北側を東西に伸びる土塁のような高まりの東端にあたる。墳丘の北側では、標高241.7m付近から北側はわずかに東に傾斜する平坦面が続いていた。

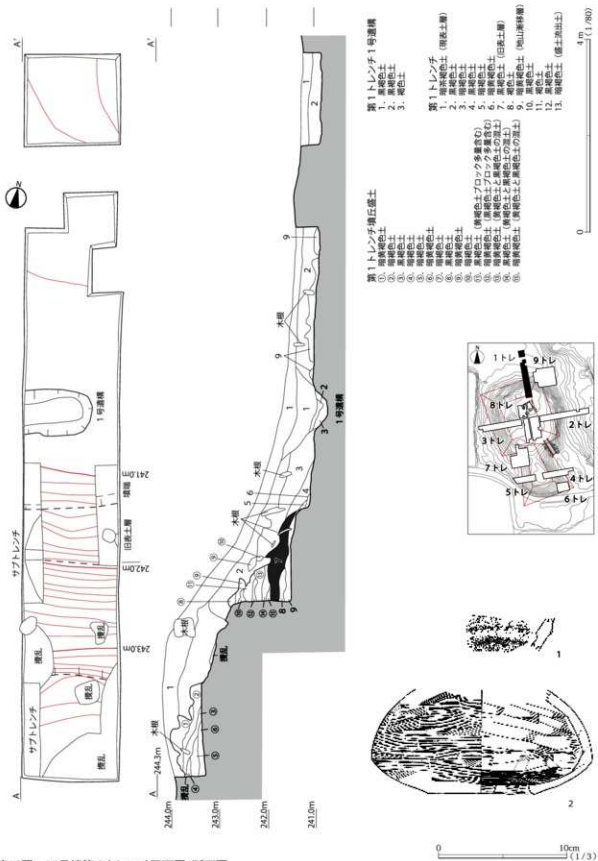
調査は、周溝の有無を確認するため、北半の平坦面の掘り下げを先行し、徐々に南半の斜面部や墳頂部へ移行した。北半の平坦面では、地山漸移層と思われる9層を挟んで砂礫を含む黄褐色の地山層が露出した。この地山層は、トレンチ北端までほぼ平坦に続いており、大きな落ち込みなどが確認できないことから周溝は存在しないことが明らかとなった。南側の斜面部付近では、西壁外へ伸びる1号遺構を発見した。西壁面を観察すると2層から掘り込まれていることから、古墳より新しい遺構と判断される。



第16図 支群A測量図



第17図 35号墳測量図・トレンチ配置図



斜面部では、墳頂部付近の攪乱坑を含めて1層から3層まで85～94 cm掘り下げると、標高242.0 m辺りを境として、上方に黒褐色土と黄褐色土の互層状の堆積層が露出し、下方では1号遺構の南側辺りの地山層まで黒褐色土が埋れていた。墳頂から高さ0.9 m前後、斜面距離で1.4 m前後の範囲の墳丘面は、地山層と旧表土層を削って成形したことによる。墳丘斜面は、盛土や旧表土層の流失、木根の攪乱坑などによる細かな凹凸が見られるが、段築を示すような傾斜変化は確認できなかった。盛土は、東西両壁下に入れたサブトレンチの断面で⑧から⑯まで8層を確認した。これらは概ね黄褐色系の混合土と黒褐色系の混合土を交互に積んだ状態で、西壁下のサブトレンチ南断面ではそれぞれ10 cm前後の厚みがあった。

墳頂北端付近では、1層を10 cm前後掘り下げると中央部に暗黄褐色の盛土が露出したが、西壁の斜面側や南壁から東壁にかけては大きく攪乱を受けており、中央部と同じレベルで盛土を検出できなかった。西壁下にサブトレンチを入れて断面で盛土の状態を観察した結果、①とした最上層はしまりが弱く凹凸が見られるが、②から⑥では版築状に安定した状態で積み上げられていることが確認できた。土層のような高まりの基底面より下まで盛土が埋まっていることから、神社の敷地造成時にトレンチの南端辺りまで墳丘が削られ、残丘となった部分が遺存しているものと思った。なお、墳頂北端については攪乱の影響によりわずかな範囲での所見となったが、傾斜の変化が見られる標高243.6 m前後と考えられる。

第18図1は、有段口縁壺や鉢あるいは高坏と考えられる土師器の破片である。段の外縁はギザミが施され、その下はミガキが施されている。第18図2は、斜面部中腹の盛土面から出土した小型壺の胴部から底部にかけての資料である。算盤玉を潰したような器形で、最大径は底部近くにある。非常に丁寧なつくりで、底部は焼成前に粘土を切り取って穿孔している。外面はハケメ、内面は下端がハケメ、それより上はナデが施されている。復元胴部最大径16.5 cm、残存器高8.4 cm、復元口径7.8 cmである。胎土が近似する頸部・口縁部の破片が第9トレンチから出土している。

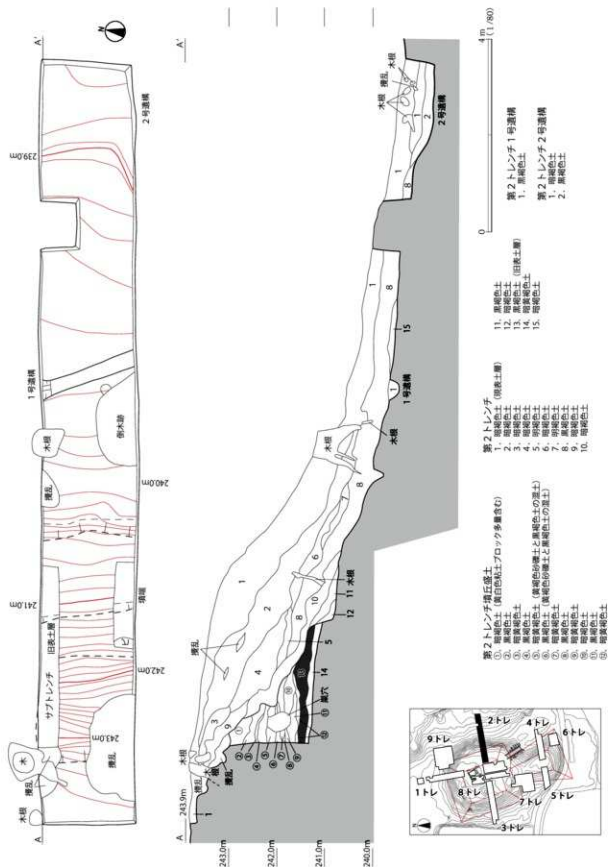
2. 後方部東側・第2トレンチ (第19図、図版4)

第2トレンチは、想定主軸線に直交する後方部想定中心線上の墳頂東端付近から東斜面を経て、墳丘外と推定される緩斜面にかけて設定したトレンチで、後述する後方部西側の第3トレンチと正対する位置にある。調査前は墳頂東端付近と認識していた地点が、神社の敷地として整地されたとみられる平坦面の東端付近にあたる。

墳丘外と推定される緩斜面では、1・8層を54～90 cm掘り下げると、部分的に堆積する漸移層を挟んで砂礫を含む黄褐色の地山層が露出した。この地山層は、緩い傾斜でトレンチ東端近くまで一様に続き、第1トレンチと同様に周溝のような大きな落ち込みは確認できなかった。

1号遺構は、トレンチ東端から西へ6.5 m前後のところに位置し、南と北がトレンチ外へ抜ける南北方向の溝跡である。北壁下を掘り下げて断面を観察すると、地山層から掘り込まれていることから、古墳築造に関与する遺構の可能性が高い。検出面の幅は30～36 cm、深さは約21 cmで、堆積土は黒褐色土の単層であった。2号遺構は自然地形の窪みではないかとも考えられる。

斜面部では、当初の予想をはるかに超える分厚い堆積土に阻まれ調査が難航する。墳頂東端付近と認識していた地点とそこから続く斜面は、1.5～2.5 mの堆積土があることから、墳丘斜面はかなり西に寄っていることが明らかとなった。このため、トレンチを西に拡張しながら掘り込みを継続すると、現斜面から墳丘側に3 m以上入り込んだ位置で、標高241.5 m辺りを境として上方が黄白色粘土混じりの暗褐色土や黄



第19図 35号墳第2トレンチ平面図・断面図

褐色土と黒褐色の互層状の堆積層、下方が黒褐色土の墳丘斜面を検出した。この時点で、黄白色粘土混じりの暗褐色土や互層状の堆積層は墳丘盛土、黒褐色土は旧表土層と認識できた。しかし、黒褐色土から地山層への移行部分に傾斜変化が見られず、墳端を確定するまでには至らなかった。標高240.8m辺りで約22cmの立ち上がりが見られたことから、この立ち上がりの下端が墳端と判断した。したがって、墳端から高さ0.7m前後、斜面距離で1.2m前後の範囲の墳丘面は地山層と旧表土層を削って成形したことが明らかとなった。

墳端の東1.4～1.6mの範囲は比較的平坦で、東側墳端の外側に一定範囲で平坦面が作出された可能性がある。本第2トレンチでは、他のトレンチでは見られない分厚い堆積土を確認したが、弥生土器から近代の陶磁器類まで混じって出土していることから、かなり新しい時期に人為的に動かされた土の可能性が高い。具体的には、神社の敷地造成時に広い平坦面を確保するため、墳丘を削った土を東斜面に押し出したものと考えている。

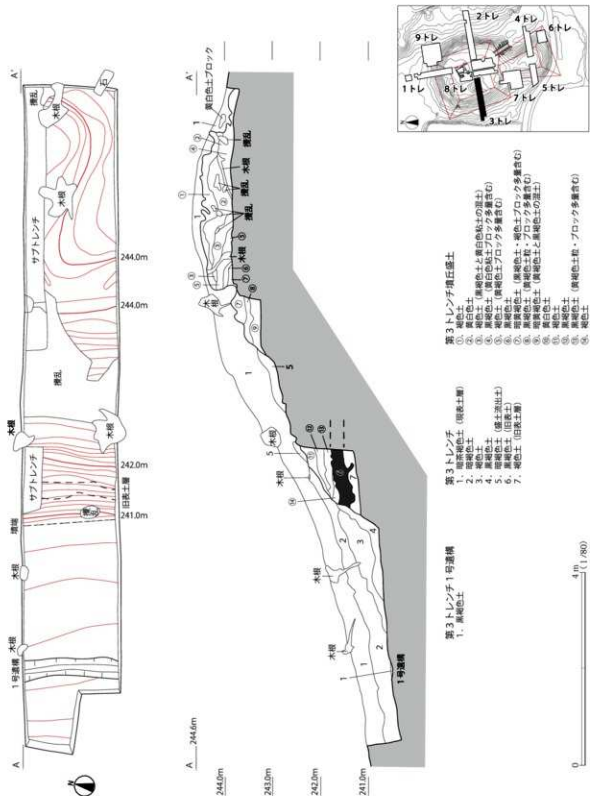
盛土は、①から⑫まで確認した。これらは概ね黄褐色系の混合土と黒褐色系の混合土を交互に積んだ状態であったが、①のみ黄白色粘土ブロックを多量に含み、他と色調や土質が異なっていた。また、①～③は比較的水平に積まれていたが、厚みの少ない④～⑫は北に向かって傾斜していた。墳頂東端付近は、墳丘斜面と同様に想定していた地点から3m以上墳丘側に寄った位置で検出した。標高240.4m辺りに斜面に移行するような傾斜変化が見られることから、この部分が墳頂東端と考えた。なお、墳丘斜面のサブトレンチで検出した最上層の盛土⑩は墳頂の盛土に類似することから、墳頂から一定の範囲は黄白色粘土を主体とする混合土で仕上げられている可能性が高い。

3. 後方部西側・第3トレンチ（第20図、図版4）

第3トレンチは、想定主軸線に直交する後方部想定中心線上の墳頂西端寄りから西斜面を経て、傾斜が変わり墳丘外と推定される緩斜面にかけて設定したトレンチで、前述した後方部東側の第2トレンチと正対する位置にある。

墳丘外と推定される緩斜面では、1・2層を65～85cm掘り下げると西端から東へ約2.3mの範囲に砂礫を含む暗褐色の地山層が露出した。また、その東側では、1・2層の下に3層と4層がさらに堆積しており、これらを含めて85～133cm掘り下げて同様の地山層を検出した。この地山層は、トレンチ西端に向かって緩い傾斜で一様にながっており、現地表面で30cm以上低くなるトレンチ外西側の畑地に立ち上がりを想定できない。そのため、ここでも周溝のような掘り込みはないものと判断した。西端寄りで南北に伸びる1号遺構を検出した。北と南の両壁断面を観察すると地山層から掘り込まれていることから、古墳築造に関係する遺構の可能性はある。

斜面部では、25～113cm掘り下げると、標高241.6m前後を境として、上方に黄白色粘土と黒褐色土混じりの暗黄褐色土や褐色土、下方に黒褐色土が露出し、さらに黒褐色土の下に褐色土と黄褐色ロームを確認した。この時点でこれらはいずれも墳丘面の構成層と認識したが、さらにそのことを明確にするため、斜面下部の北壁下にサブトレンチを入れ、断面で各層の観察を行った。その結果、上方の黄白色粘土と黒褐色土混じりの暗黄褐色土や褐色土は墳丘盛土、その下の黒褐色土（6層）は墳丘盛土下に堆積する旧表土層、最も下の黄褐色ロームは緩斜面で確認した地山層の上に堆積する別の地山層であることが判明した。墳端は、黄褐色ロームから緩斜面の地山層に移行するL字状の傾斜変換部と考えられ、この部分の標高は240.8m前後であることから、墳端から高さ0.8m前後、斜面距離で1m前後の墳丘面は、黄褐色ロームから旧表土層までを



第20図 35号墳第3トレンチ平面図・断面図

削って成形したことが明らかとなった。

盛土は、主に黄褐色土や黒褐色土の含有量が異なる褐色系の土を積んだ状態で、それぞれの厚みにばらつきがあった。

墳頂西端寄りでは、1層を5～25 cm掘り下げると、木根の攪乱などにより表面がかなり荒れた状態で褐色の盛土が露出した。この盛土は、神社の敷地造成時に敷地と外側を区切るために盛られた可能性もあったことから、北壁下にサブトレンチを入れて断ち割り調査を行った。その結果、70 cm前後の深さまでの間に①から⑨を検出したが、これらは自然堆積層とみられる間層を挟まず連続して積み重ねられていたことから、古墳築造時の盛土であることが再確認できた。したがって、第1トレンチと同様に神社の敷地造成時に、削平されずに残った墳丘盛土が、土塁のような高まりとして遺存したものと考えられる。

4. 前方部東側・第4トレンチ (第21図、図版4)

第4トレンチは、想定主軸線に直交する東西線上の墳頂東端付近から東斜面を経て、傾斜が変わり墳丘外と推定される旧神社参道にかけて設定したトレンチである。

旧神社参道の平坦面では、拡張部の堆積土との関係から2・3層とした暗褐色土を25～35 cm掘り下げると、砂礫を含む黄褐色の地山層が露出した。この地山層はほぼ平坦に広がり、ここでも周溝とみられるような掘り込みは確認できなかった。

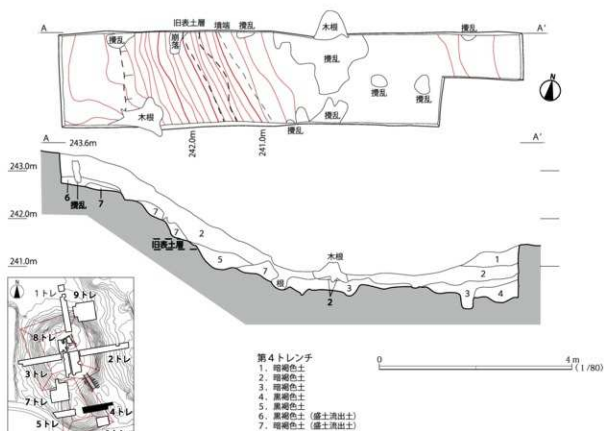
斜面部では、全面に堆積する2層と部分堆積の5・7層を45～76 cm掘り下げると、標高241.5 m辺りを境として、上方に黒褐色混合土と黄褐色混合土による互層状堆積層、下方に黒褐色土と黄褐色ロームが露出した。これらは、他のトレンチの墳丘斜面と同様な堆積状況であったことから、上方の互層状堆積層は墳丘盛土、下方の黒褐色土は旧表土層、その下の黄褐色ロームは平坦面の地山層の上に堆積する別の地山層であると判断した。また、標高241.0 mと240.9 mの間には、斜面から平坦面に移行するような地山層の傾斜変化が見られることから、この部分を墳端と考えた。したがって、墳端から高さ0.6 m前後、斜面距離で0.8 m前後の墳丘面は、旧表土層から地山層までを削って成形したものと思われる。

墳丘斜面は、段差を示すような傾斜変化は確認できなかった。墳頂東端付近は、2・6・7層を51～65 cm掘り下げると黄白色粘土や黒褐色土混じりの黄褐色盛土層が露出した。この盛土は、後述する第5トレンチ東端の盛土よりも20 cm前後低い位置で検出したことから、墳頂は東に傾斜している可能性がある。標高242.5 mと242.6 mの間に斜面へ移行するような傾斜変化が見られることから、この部分を墳頂東端と判断した。

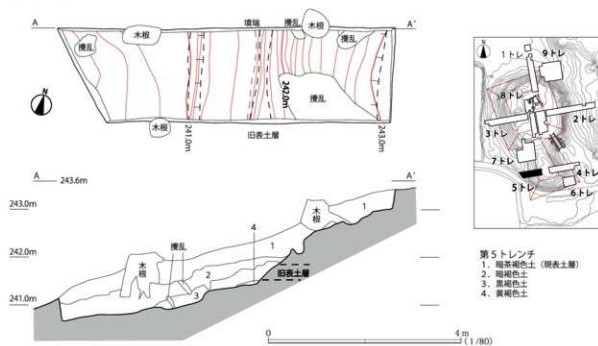
トレンチ東よりの位置では、1～4層を45～120 cm掘り下げると、平坦面から続く地山層が露出した。この地山層は、東に向かって緩く傾斜していた。旧神社参道の造成に伴う地面の掘削により相対的に高くなった部分と思われるが、1層の暗褐色土と2層の暗褐色土がかなり類似していることから、造成時の残土を積んだ部分が1層の可能性もある。

5. 前方部西側・第5トレンチ (第21図、図版4)

第5トレンチは、想定主軸線に直交する東西線上の墳頂西端付近から、西斜面にかけて設定したトレンチである。30～98 cm掘り下げると、標高241.8 m前後を境として上方に黄白色粘土ブロック混じりの暗褐色土、下方に黒褐色土と黄褐色ロームが露出した。これらは、他のトレンチの墳丘斜面と同様な堆積状況であったことから、上方の暗褐色土は墳丘盛土、下方の黒褐色土は旧表土層、その下の黄褐色ロームは地山層と判断した。また、標高241.4 m付近には、墳丘斜面とその外側を区切るような地山層の傾斜変化が見られること



第4トレンチ



第5トレンチ

第21図 35号墳第4・5トレンチ平面図・断面図

から、この部分を墳端と判断した。したがって、墳端から高さ0.4m前後、斜面距離で0.5m前後の範囲の墳丘面は、旧表土層から地山層までを削って成形したと考えられる。

墳端の西1.0m前後の範囲は比較的平坦な地山層で、人為的に掘削されたとみられる20cm前後の段差を経てさらに西側へ緩い傾斜が続いていることから、この辺りの墳端の外側には一定の幅でテラスのような平坦面が作出されている可能性がある。墳丘斜面は、段差を示すような傾斜変化は確認できなかった。墳頂東端は、ほぼ平坦になる標高243.0m辺りと考えている。

6. 前方部南東端・第6トレンチ（第22図、図版6）

第6トレンチは、南側墳端を確認し、墳長を把握するために設定した。35号墳の南側墳端周辺は、農道の敷設により一部削られていることが現況でも観察できたため、その影響が南西端よりは少ないと判断した前方部の南東隅周辺を調査地点とした。

トレンチ範囲内の北西を中心に墳丘盛土が確認でき、その下層には黒褐色土を基調とした古墳築造前の旧表土が残存し、さらにその下層に黄褐色を基調としたローム質と礫質の地山が順に堆積する。上層のローム質土が墳丘面を形成するように斜めに削られている一方で、下層の礫質土はおおむね平坦である。このような状況は北側に隣接する第4トレンチと同様であり、墳丘周囲の旧表土やローム質土を削り取り、その掘削土で墳丘を積み上げたことが分かる。

前方部東側の墳端については、見た目の墳端に明確な段が認められず、35号墳の他の場所で確認できた墳端とは様相が異なる。この部分には、かつて主丘部上にあった菅布瀬神社の参道が伸びており、その敷設に伴い墳丘が改変された可能性がある。北側に隣接する第4トレンチで墳端と判断した傾斜変換線は墳丘側に入り込んだ位置にあり、第6トレンチの見た目の東側墳端と連続しない。そのため、前方部の東側墳端が参道敷設で改変されたと考えている。

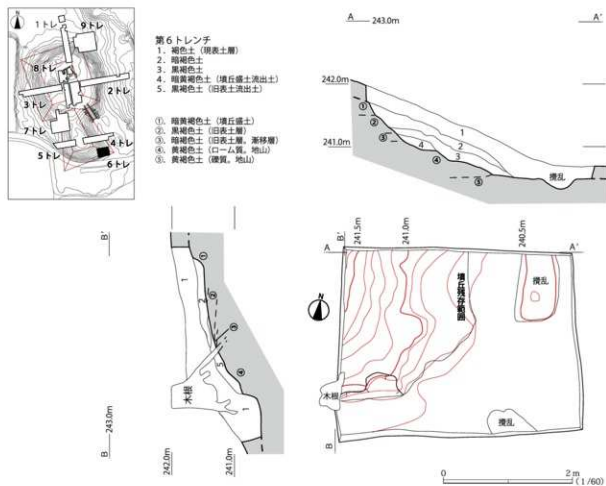
見た目の墳端は、トレンチ範囲内の北側半分ほどではローム質土の範囲と重なり、南側ではローム質土の範囲から離れて西側へと曲がり、前方部の南側墳端が想定できるあたりで段状に削られた急斜面の下端に接続する。35号墳では、第1～3・5トレンチ及び第7トレンチにおいて、地山を急角度に掘削して墳端を形成していたことが確認できており、第6トレンチで確認した急斜面のこの段が、南側の墳端となる可能性があった。しかし、この部分が農道の北側法面と傾斜面を共有していること、そして、後述するくびれ部や後方部北東端で明確な墳端が確認され、墳形が推定されることから、前方部南東端は農道敷設の影響を受け、削平されていることが判明した。

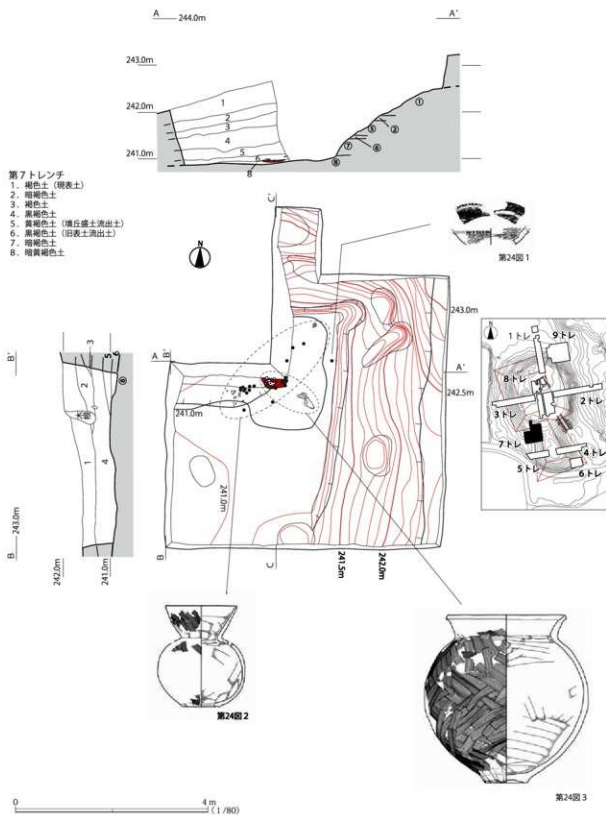
7. 西側くびれ部・第7トレンチ（第23～25図、図版5・7）

第7トレンチは、35号墳の西側くびれ部の形状を確認し、墳形を判断するために設定した。第5トレンチの北側に3m離れた場所に位置する。前方部には、現況で北側3分の1ほどの場所に数部が認められ、その東西にくびれ部があると想定してトレンチの位置を決定した。しかし、当初の予想よりも北にくびれ部が位置していたためトレンチを北側に拡張した。

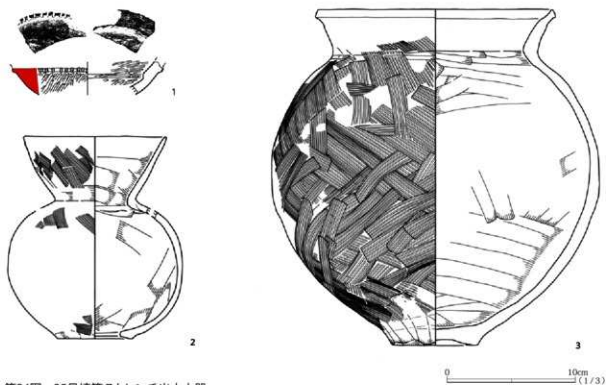
くびれ部の角度は鋭角で、主丘部の南墳端が直線的であることから、墳形は前方後方墳と判断できる。くびれ部は意図的な掘削により墳丘側へ食い込む。墳丘基底部は前方部・後方部ともに旧表土とローム質土を急角度に削り込んで成形している。

墳丘傾斜面は、この下位の急斜面と上位の緩斜面とで角度が異なる。墳丘の周囲に明確な周溝はないが、後

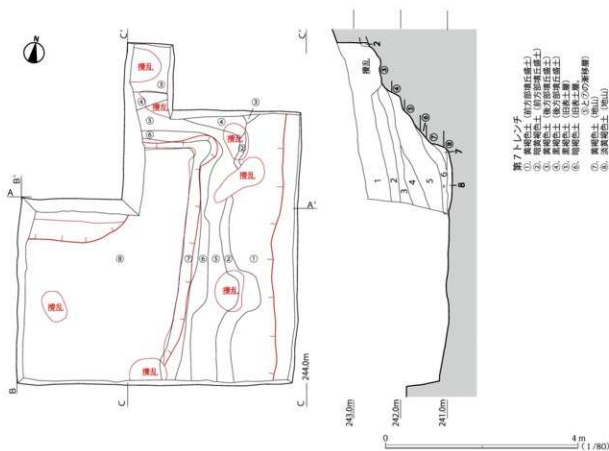




第23図 35号墳第7トレンチ平面図・断面図



第24図 35号墳第7トレンチ出土土器



第25図 35号墳第7トレンチ土層分布図・断面図

方部の南西墳端に沿う窪みが確認できた。墳丘の要所を意図的に深く掘削した痕跡と考えられる。

トレンチ南壁中央付近において凸状の盛り上がりを確認したが、この部分には複数の攪乱があり後世の改変と判断される。第7トレンチで確認した墳端は、第5トレンチで想定した墳端線と連続しないが、この墳端線より下位に位置する地山を削り込んだ段の下端と連続的な位置にあり、形状も近似する。前方部上端は比較的明瞭な傾斜変換線として認識できたが、この傾斜変換線も第5トレンチの上端線と連続しない。

墳丘の堆積層は第6トレンチと同様で、旧表土やローム質土を削って基底部を作り、その上に盛土を積み上げている。ただし、前方部と後方部では墳丘盛土に切れ目があり堆積層が連続しない。主丘部となる後方部の盛土を先に行い、後から継ぎ足すようにして前方部に盛土したと考えられる。

遺物の多くは6層から出土した。単口縁の壺(第24図2)は、大小の破片が上位からくびれ部を流れ落ちるような状態で出土した。後方部上から転落・破碎したと考えられる。甕(同図3)はくびれ部の底面と6層から出土した。南東側の比較的大きな破片は底部から胴部、北西側の小さな破片は口縁部付近の破片である。底部のあった位置に置かれていたものがその場で壊れ、破片が北西側へ拡散したと考えられる。甕の口縁部付近破片直下の8層上面は赤く変色し、その周囲に若干量ながら粒径1mm程度の赤色物質が認められた。変色範囲や粒状物質の色調は赤みが強く紅色である。赤色顔料の染み込みもしくは焼土面とみられる。

第24図1の土器破片は鉢・高坏もしくは有段口縁壺の口縁部付近とみられる。内外面にヘラミガキが施され、外面は赤彩されている。外面の稜線には刻み目がある。第1トレンチでも類似する資料が出土している(第18図1)。同図2の壺は外面にハケメ調整が施される単口縁の壺である。底部を丁寧に破碎することで穿孔している。同図3の甕は、口縁部外面は面取りがなされ、口唇部が上方に突出する球形胴の甕である。

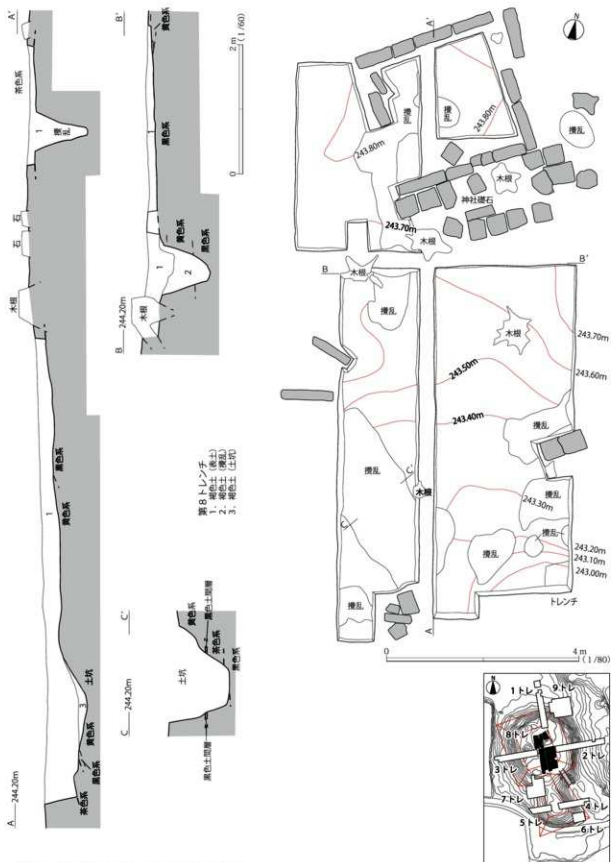
8. 後方部墳頂・第8トレンチ (第26図、図版6)

第8トレンチは、後方部に存在が想定できる埋葬施設を確認するために設定した。表土の掘削を開始したところ、トレンチ内の広い範囲に動物の巣穴が存在することが判明した。

表土直下は全て墳丘盛土であり、その上面の複数個所に焼土面を確認した。菅布禰神社社殿は火災による焼失後の1968(昭和43)年に現在地へ移動しており、焼土面はその火災の痕跡とみられる。当初の想定通り、後方部上面は大きく削平されていた。ただし完全に水平な状態ではなく、北側がやや高く、南側に向かって緩やかに傾斜している。

表土除去後の精査において、社殿基礎の南側を中心に、方形基調の平面を呈する黒色土の広がりを確認した。埋葬施設の墓坑の可能性も考慮したが、この黒色土が黄色を基調とする墳丘盛土の下層へ続くことと、墓坑にしては平面形状が不自然であることから、墳丘盛土の一部と判断した。この部分以外では、埋葬施設の存在をうかがわせる状況は認められなかった。後方部の埋葬施設が、墳丘の完成後に墳頂から墓坑を掘り込むタイプであれば、社殿建設に伴う削平により、それが失われた可能性がある。一方で、墳丘の築造途中に埋葬施設を構築するタイプであれば、現存する墳丘盛土内に埋葬施設が残存している可能性もある。

トレンチ内の南西部では、近世以降の攪乱が見つかった。この壁面を精査して墳丘盛土を観察したところ、標高242.9m前後で盛土の不連続面があり、その不連続面に黒色土の薄い層が形成されていることが確認された。この面の上下の土層は、いずれも北側が高く、南側が低くなる傾斜で堆積している。北側から南側へ土砂を落し込むようにして、墳丘盛土を形成したと予想できる。ほぼ平坦に続く不連続面と黒色土の間層の存在は、盛土が少なくとも2度行われ、その1回目の盛土終了後に整地が行われたことをうかがわせる。



第26図 35号墳第8トレンチ平面図・断面図

9. 後方部北東コーナー墳裾・第9トレンチ（第27図、図版6・7）

第9トレンチは、後方部の北東コーナーを確認し、後方部の平面形を把握するため設定した。第1トレンチの東側に近接する位置である。想定よりも西側で後方部コーナーを確認したことにより、このままの状態では後方部北側墳裾の形状把握が十分にできないと判断したため、トレンチを西側に拡張した。トレンチの南側で厚い堆積層が形成されているように、後方部墳頂削平の影響は北東コーナー付近にまでおよぶ。墳丘側にあたるトレンチ内中央付近の底面はおおむね平坦で、墳丘の構築に際して周囲の地山が成形されたことがうかがえる。

北東コーナーの墳裾は地山を削り出し、立ち上がりの傾斜は急角度である。墳丘傾斜面には黒色土を基調とした旧表土層が明確に認められ、その上位に盛土が積まれている。この部分の墳丘傾斜角度は比較的緩やかである。墳丘コーナーの平面形状はやや鈍角気味だが、西側に隣接する第1トレンチで確認した墳端線の位置を踏まえれば、全体としてはおおむね直角に屈曲すると考えられる。その結果、墳丘の主軸がこれまで想定していたよりも西に傾くことが判明した。

一部失われているものの、トレンチ内を北西から南東へ続く溝がある。後方部北東隅の近くでは、溝幅が円形の土坑状に広がり、その部分のみ若干深くなっている。出土遺物がないため機能した確かな時期は不明とせざるを得ないが、既往の調査も含めて、周辺からは古代・中世・近世などの遺物が出土しており、古墳築造後の遺構とみなすのが妥当であろう。

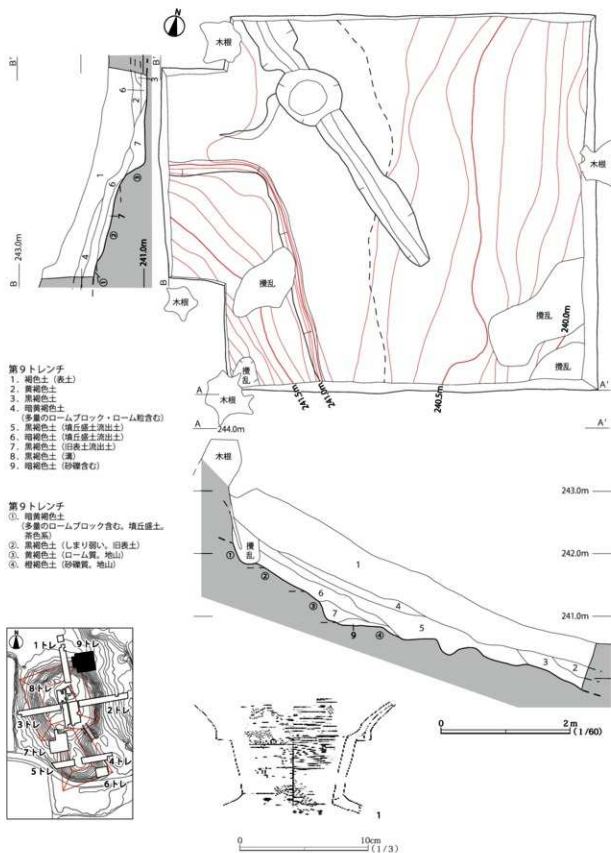
第27図1は二重口縁壺の破片で、色調が橙褐色を呈し、調整は外面がナデ、内面はハケメである。第1トレンチ出土の壺（第18図2）と色調や胎土が近似し、同一個体の可能性がある。後方部上面の北東隅上部付近に配置されていた壺が、破碎・転落した可能性がある。

調査により明らかになった35号墳の墳丘復元図を第28図に示す。

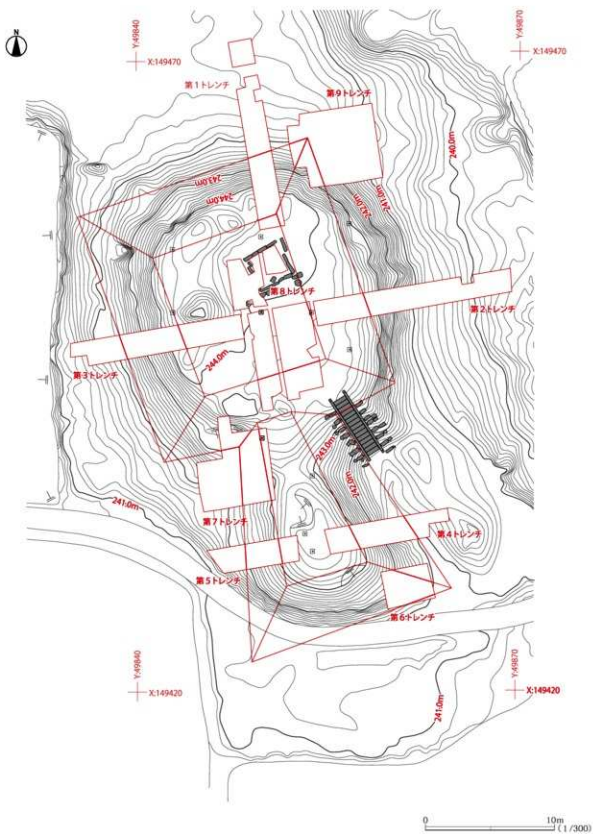
（3）正直39号墳

39号墳は、35号墳の北東約100mに位置し、35号墳とともに支群Aを構成する。正直古墳群の最北東に築かれており、付近は北北西側に向かってなだらかな傾斜が続いている。測量調査を開始した当初は、墳丘の南西・南東側が直線的であったため、一辺10mほどの方墳と考えられた。しかしその後、墳丘の北側が円弧を描くような形状であることを確認し、角も見られなかったことから、円墳の可能性が高い。前述した直線的な部分は、農地の開削の影響を受けたことによるものと推測される。墳丘規模は長径12.5m・短径10.5mで、高さは1m前後であった。

墳丘の等高線は等間隔とは言えず、特に239.5mより上部において乱れが顕著であった。このことから、墳頂部は削平を受けている可能性が指摘できる。後世の盗掘痕とみられる2か所の窪みも確認した。墳丘の周囲を廻る窪地状の地形は見出せず、等高線の形状から周溝の有無を判断することは難しい。また遺物は採集できず、築造時期は不明である。



第27図 35号墳第9トレンチ平面図・断面図



第28図 35号墳填丘復元図